【252】

氏　名（本籍）	殿山　希（北海道）（どのやま　のぞみ）
学位の種類	博　士（ヒューマン・ケア科学）
学位記番号	博　甲　第　5066　号
学位授与年月日	平成21年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	**視覚に障害のある人のメンタルヘルスと心理的支援に関する研究** －心理社会的教育プログラムの作成と効果の検討－

主　査	筑波大学教授	保健学博士	宗　像　恒　次
副　査	筑波大学准教授	博士（学術）	橋　本　佐由理
副　査	筑波大学教授	医学博士	田　宮　菜奈子
副　査	筑波大学教授	博士（医学）	高　橋　正　雄

論文の内容の要旨

（研究目的）

本研究は，職業的自立をめざす視覚に障害のある人のメンタルヘルス向上への心理的支援をめざした効果的介入法を開発することを目的としたものである。まず，視覚に障害のある人が就いている職業として最も多いマッサージ業に着目して，視覚に障害のあるマッサージ師のメンタルヘルスの状況を調査し，メンタルヘルスの心理社会的要因を明らかにし，つぎに，視覚に障害のある人のメンタルヘルス向上のための具体的介入法を検討し，その有効性を検証するという4つの研究課題をもってすすめられた。

（研究課題I）

（目的）視覚に障害のあるマッサージ師のメンタルヘルスの状況を調査し，その仕事要因を明らかにする。

（対象と方法）全国の10校の盲学校専攻科の卒業生から無作為に900人を抽出し，視覚に障害のあるマッサージ師に対して，無記名自記式質問紙調査を郵送法で行った。

（結果）バーンアウトや抑うつは一般的な水準にあったが，特性不安値は高かった。マッサージ師としての職場別で検討すると，病院・医院・老人施設勤務群は他の2群に比較して1日に取り扱う患者数が有意に多く，また，治療院開業群に比較して，バーンアウト傾向がみられた。特性不安については3群間に有意差はみられなかった。一方，普通字が読める視覚に障害のあるマッサージ師は点字を使用しているマッサージ師に比較して，有意に特性不安値が高かった。

（考察）1日に取り扱う患者数が多く，仕事内容について医師の指導下にあり独自性や裁量権が少ない病院・医院・老人施設で働くマッサージ師にバーンアウト傾向がみられたことは，看護師のバーンアウト研究の結果と同様であり，病院等で働くマッサージ師には，看護師同様のバーンアウト対策が必要であることが示唆された。

（結論）特性不安の高値はマッサージ師としての仕事要因より視覚障害の状況とより関連することが示唆された。

（研究課題 II）
（目的）視覚に障害のあるマッサージ師の特性不安の心理社会的要因を明らかにし，それが視覚障害状況の違いで差があるかを検討する。
（対象と方法）研究課題 I と同時におこなった。
（結果）重回帰分析の結果，特性不安には日常苛立ち事，無力体験，自己抑制型行動特性，自己価値感，情緒的支援認知が有意に強い影響を示した。また，対象者は，普通字使用群が点字使用群に比較して，特性不安値が有意に高かった。またメンタルヘルスの悪化をもたらす自己抑制型行動特性得点において，学童・思春期受障群が成人期受障群と比較して，有意に高かった。
（考察及び結論）本対象は，他の対人専門職種の報告に比較して自己抑制型行動特性得点が高く，自己の感情や欲求を日常的に抑制する傾向があること，視覚の障害による失敗体験が繰り返されることで無力体験（学習性無力）が高く，日常苛立ち事が多く，自己価値感が低く，情緒的支援認知が低いことが特性不安を高めていることが示唆された。比較的軽度の障害の人や学童・思春期に障害を受けた人に心理的ケアとコミュニケーションスキルの必要性が示唆された。
（研究課題Ⅲ）
（目的）視覚に障害のあるマッサージ師のメンタルヘルスの問題点である特性不安の低下を目的とした心理社会的教育プログラムを作成する。
（方法）①無力体験や②自己抑制傾向を低下させ，③自己価値感や④情緒的支援認知を高めることで，視覚に障害のある人の特性不安が低下すると考え，先行研究のレビューを行い，プログラムに必要な要素を決定し，プログラムを作成した。
（結果）
①学習した無力感を改善し，自己イメージスクリプトを改善する目的で，宗像が開発した SAT イメージ療法を活用する，②自己抑制傾向の軽減を目的に，SAT ソーシャルスキル法を用いる，③ SAT イメージ療法をグループアプローチの形で実施し，グループダイナミックスとピアサポートを活用するプログラム開発を行った。
（研究課題Ⅳ）
（目的）研究課題Ⅲで作成した心理社会的教育プログラムを用いて視覚に障害のある人に介入を行い，その有効性を検討する。
（対象と方法）対象は，普通字が読める視覚に障害のある男子大学生 15 人。4 グループに分けて，グループアプローチとして作成プログラムによる介入を行い，介入前，介入直後，1 ヶ月後，3 ヶ月後に心理尺度を用いて測定を行い，比較した。コントロールとして，介入 1 ヶ月前の値と介入直前の値を比較した。
（結果）介入を行わない 1 ヶ月間では，心理尺度に有意な変化はみられなかった。特性不安高値群では，介入前に比較して，無力体験が介入直後，1 ヶ月後，3 ヶ月後に有意に低下し，3 ヶ月後の自己価値感が有意に高く，特性不安も有意に低下した。自己効力感を示す自己自信度は介入後有意に高く，1 ヶ月後，3 ヶ月後と得点はさらに高くなった。
（考察）過去の自己成育情報に拠らない方法で一定の仮定法に基づく自己イメージ構築を図る SAT 自己イメージ法のグループアプローチにより，自己イメージスクリプトが変更され，無力体験が低下したと考えられる。新たに創られた自己イメージスクリプトは想像の反復と，グループアプローチの参加者同士の絆や共感から強化され，3 ヶ月後に自己価値感を高め，特性不安が低下しと考えられる。
（結論）SAT 法を中心に構成して作成した視覚に障害のある人の特性不安を低下させるための心理社会的教育プログラムを視覚に障害のある大学生のグループに行い，自己イメージを改善することで特性不安を改善させることに有効であった。手順を構造化しており，ピアを活用することから，他施設の視覚障害者教育の

場においても活用可能なプログラムであると考える。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は，視覚障害のある人のメンタルヘルスを支援する心理社会的教育プログラムの必要性を明らかにするとともに，実際の介入を行い自己イメージの再構築を行うことでメンタルヘルスが向上することを示した世界でも貴重な研究である。過去の自己生育記憶を参照しないで，一定の仮定法で自分の存在を守護され，好きなことを好きなように仲間同志でイメージワークし，その自己イメージを具体的な行動目標にコーチングすることで，視覚に障害がある人が自己イメージを肯定的に再構築して，メンタルヘルスを改善できたことを，フォローアップ調査で明らかに出来たことを評価したい。なお，本研究をベースとした論文は，我が国の学術雑誌のみならず著名な視覚障害の国際誌に発表され，国際的に評価されているものである。

よって，著者は博士（ヒューマン・ケア科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。